

## 第2部 地域における協働実践モデルを探る —学校を中心にして

### 第1章 外国につながる子どもの情報を 共有し支援のニーズを知る



こんだ  
**近田由紀子**  
浜松市立瑞穂小学校教諭

#### 1. 支援体制の強化

平成20年4月、本校は、全校児童843人のうち外国籍児童が93人、日本国籍を持つ外国につながる児童が28人在籍していた。そのため、5月より新しい支援体制がつけられ、学校外から多くの支援者がかかわるようになった。

#### 2. 瑞穂小の外国人児童支援体制

- (1) 外国人就学支援員・外国人就学サポーターは、浜松市教育委員会より派遣。
- (2) 「はまっこ」「算数学習支援」は、NPO法人浜松市外国人子ども教育支援協会より派遣。
- (3) 「算数学習支援」は浜松市内で初めての試みで、退職教員が支援にあたることになった。月曜日を除き、2人ずつ活動する。
- (4) 地域ボランティア団体「そらの会」は、月曜日4人、水・金曜日は2人ずつ

活動する。

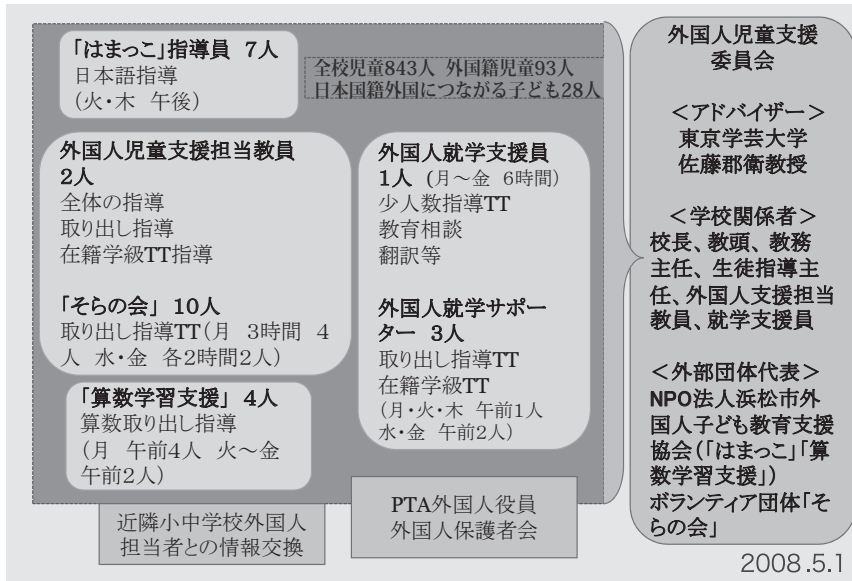


図6 瑞穂小の外国人児童支援体制

### 3. 支援をつなぐ試み

平成20年度は、新たに「はまっこ」「算数学習支援」が加わったり、前年度まで放課後支援をしていたボランティア団体「そらの会」が授業時間内に外国人児童支援にかかわるようになったりした。総数にすると27人が直接子どもたちの支援にかかわるのだが、支援者も曜日によって変わるという状況にあった。一人の子どもに何人もの支援者がかかわることもある。

これだけ多くの人がかかわることは、子どもたちを支えるために大きな力になるが、混乱も招きかねない。ともすると各支援者がばらばらの内容で、子どもにとって本当に必要な支援を見逃してしまわないかという心配があった。

そこで、校長の指示により、各支援者の連絡調整を行う組織「瑞穂小外国人児童支援委員会」(以下、委員会という)を設立し、その運営と全体の調整を外国人児童支援担当教員(以下、担当教員という)が中心となって行うこととなった。新体制になった初年度であるので、当初から内容を固定するのではなく、実態把

握に重点をおいて各支援をつなぐ試みを柔軟に行っていこうと考えた。その実践にあたって、次の点を大切にした。

- ・ 外国人児童支援のねらいをきちんと示すこと
  - ・ 外国につながる子どもの情報を共有すること
  - ・ 支援のニーズを知るための情報交換を積極的に行うこと
- 具体的な手立てとしては、下記に示す取り組みを行った。

- ・ 外国人児童支援委員会の設立・定期的な開催
- ・ 合同研修会の実施
- ・ 外国人支援交流週間の実施
- ・ 共用ファイル・個別シートの活用
- ・ 日常の情報交換

#### 4. 瑞穂小外国人児童支援のねらい

- (1) 外国につながる子どもが、在籍学級の学習に参加するための学ぶ力を高める。
- (2) 外国につながる子どもが、人間関係づくりのためのスキルを身につける。
- (3) 外国人保護者が、学校教育に対する関心を高める。

#### 5. 情報の共有から支援のニーズを知る

##### 5-1. 瑞穂小外国人児童支援委員会

委員会は、各支援団体代表、校長、教頭、教務主任、生徒指導主任、担当教員、アドバイザーとして大学関係者で構成され、平成20年7月から平成21年3月までに4回開催した。単なる報告会になってしまわないように、また情報が拡散してしまわないようにするため、資料を提示したり、次の課題について整理したりできるように協議を進めた。

第1回 内容：瑞穂小学校外国人児童支援のねらいの提示  
支援者から見た子どもの実態、支援内容について情報交換  
課題：限られた時間内でいかに力をつけるか  
子どもの心の安定、子ども理解のための情報共有

第2回 内容：在籍学級担任も含めた情報共有、連携について協議  
個別シート、共用ファイル、合同研修会について提案  
課題：在籍学級担任との連携

第3回 内容：個別シート記入例と支援内容を一元化した指導記録サンプル提示

サンプルからわかる授業の工夫、支援者の役割について協議

課題：子どもをどう支えていくのか

お互いの授業を見合う機会の設定（外国人支援交流週間）

うまくいった例を積み重ねていくこと

第4回 内容：外国人支援交流週間アンケート結果提示

子どもの変容、できるようになったことについて協議

課題：子どものできることを増やし自信につなげる

子ども一人ひとりの目標、学習のステップ、学び合いの場をつくる

はじめは、支援者の戸惑いや不安について協議されることが多かった。「自分たちのやりたいことと違う」という発言まで飛び出すこともあった。しかし、子どもの姿から何が見えるのか、どんな支援がよかったのかを振り返りながら議論を進めていくことを大切にしたりした。また、子どもたちが安心して学習に取り組み、できることが増えてくるにつれて、協議内容も変わってきた。学校文脈の中で自分たちの支援を見なおし、「子どもが求めているもの、必要なものはなにか」「子どもたちをどう支えていくのか」という議論が主となっていったのである。ある参加者から、「この会のよさは、子どものために自分たちも変わることができること」という言葉があった。子どもたちとともに支援者も学び合い、可能性を広げていけることを言い得ているのではないだろうか。

## 5-2. 合同研修会

支援者だけでなく、瑞穂小学校職員や近隣小中学校の外国人児童生徒教育担当者も交えて合同研修会を3回実施した。その形態や参加者は、目的や内容に応じて異なる。支援者の直面している課題に対応できるように設定した。

校内全体研修会では、全職員、近隣小中学校の外国人児童生徒教育担当者、各支援団体代表者及び希望者が参加した。アドバイザーである東京学芸大学佐藤郡衛教授を迎えて、外国人の子どもの学ぶ力について研修を行った。

日本語指導研修会・算数支援研修会では、担当教員だけでなく支援者も授業を公開し、早稲田大学池上摩希子准



校内全体研修会

教授を迎えて協議を行った。

支援者は、日ごろ研修の機会が少ないため、研修への期待感も大きい。講話や公開授業は多くの参加を呼びかけ、協議は少人数で行い悩みや指導法について率



公開授業



日本語指導研修会

直に話せる場とした。基本的な考え方を知るとともに、支援者の思いを表出できる機会でもあったのではないかと考える。

### 5-3. 外国人支援交流週間の実施

委員会協議の中で、「子どもたちを見て、どういう指導をしたらよいか考える」「相互乗り入れ、お互いに授業を見合うことが一番の近道ではないか」という提案があった。限られた支援時間の中で、「さあ、お互いの授業をみましょう」と呼びかけても実行は難しい。そこで期間を限定し平成21年1月に「外国人支援交流週間」を実施した。

支援者が在籍学級の様子を参観する。在籍学級担任が日本語指導や算数支援の様子を参観する。その中で、子どもの違う一面に驚いたり、丁寧な支援に感謝したり、また指導法に疑問をもったりと、短期間ではあるが、互いに知ることが多くあった。その情報提供としてアンケート結果を集約して、学校職員、支援関係者に配布したり、委員会の協議資料としたりした。

「外国人支援交流週間」の有効性が認められ、平成21年度の教育課程年間計画にも年間2回位置づけられることとなった。

#### 5-4. 共用ファイル・個別シートの活用

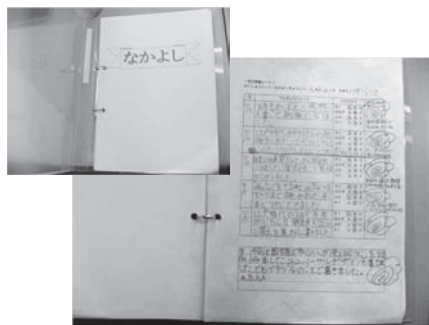
在籍学級担任と支援者、また支援者間の情報共有のために、「共用ファイル」および「個別シート」を活用している。

子ども一人ひとりが個別の「共用ファイル」を持って、各教室を移動することにした。このファイルには、担当教員の取り出し指導、「はまっこ」「算数支援」で使用したワークシートや作品、自己評価カードなどを分類して納めるようにした。

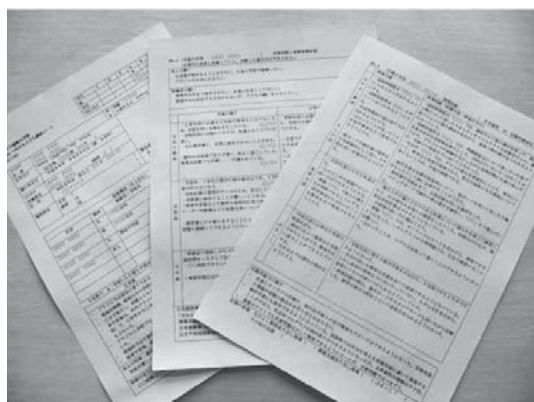
これは、子どもの学習のポートフォリオとしての機能も含む。普段情報交換をしても、一人ひとりの子どもの具体的な指導について、支援者間でやりとりをする時間を確保することが難しい。このファイルに納められたものを見て、子どもの学習状況や他の支援を知ることできた。また、各支援者の指導記録や指導方針の資料ともなった。

「個別シート」は、生育歴、家庭環境、子どもの実態、保護者の願い、必要な指導、指導記録等の情報を記載し、積み上げができるような形式にした。この形式は、川崎市で実践している「サポートノート」や他地域の例を参考にしながら、本校の支援体制や子どもの実態に合わせたものを作成している。

指導記録の部分は、各支援者の記録、在籍学級での様子を一枚にまとめて記録している。他の項目については、担当教員、在籍学級担任が主として作成するが、支援者も閲覧することができる。また、



共用ファイル



個別シート

地域の中学校へ進学する子どもについては、指導資料の一つとして、中学校担当教員に活用してもらった。

この「個別シート」に記された「指導記録」の部分を見ると、支援者や場所によって子どもの姿が違うことが分かる。学習内容の違いもあるが、支援者によって児童観・指導観が異なるのである。また、子どもがわかる指導の工夫や、できるようになったことの記載例も多い。「指導記録」は、ある意味、支援者たちのポートフォリオともなっており、多面的に子どもを見たり、他の指導の工夫を知ったりして学ぶことが多い。これらをサンプルとして委員会に資料提示したことで、委員会の協議も活性化され、「子どもを見て、どう支えていくか」ということに焦点化できたのではないかと考えられる。

## 5-5. 日常の情報交換

子どもの実態は日々変化するため、きめ細かい情報交換が必要になる。「共用ファイル」や「個別シート」だけでなく、担当教員が軸となり、該当児童の様子や必要な支援について関係者と随時コミュニケーションをとるようにしている。

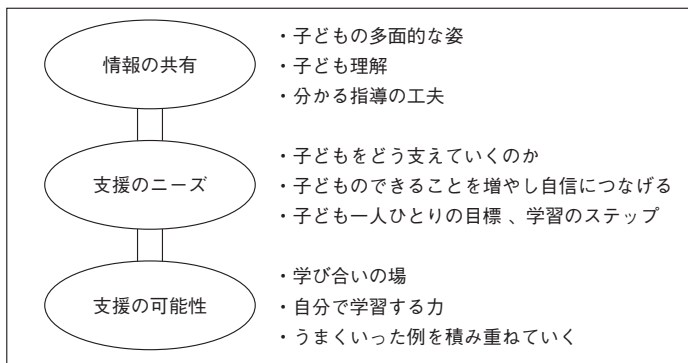
「算数支援」に関しては、特に在籍学級の学習進度が大きく関係するため、支援者と在籍学級担任が直接連絡調整できる時間を位置づけた。1週間に一度で短時間であるが、実際に顔を合わせて話し合える環境にあるため手応えがある。

## 6. 今後に向けて

平成20年度は実態把握のときとしておおらかにかまえ、「子どもの情報を共有し支援のニーズを知る」ことを第一のテーマとして、試行錯誤をしてきた。この

間、子どもの姿によって支援者たちの学び合いが促され、支援者間の柔軟な関係性をつくることのできたのではないかと思う。

ここで今一度、キーワードをまとめてみたい。



「子どものために自分たちも学び合い変わる」



一人の子どもにかかわる支援者が多いことは、連絡・調整、情報や指導方針の共有といった点で課題や大変さもあるが、その分多面的に子どもを見ることができ、多様性に対応した支援が可能になる。支援の可能性が広がるという楽しさもある。固定した役割分担を決めるのではなく、支援者間で学び合いながら、子どもにとって本当に必要な支援のニーズは何か探り、小さな実践を積み重ねていくことが、支援の可能性を広げることにつながっていくといえるのではないだろうか。

---

〔注〕平成21年度、ボランティア団体「そらの会」は、隣接学区の小学校で活動を始めることを決めた。支援体制が整ってきた本校から、支援の手が少ない隣接校で活動する。本校で学校の授業時間内に担当教員とともに支援したことで、学校教育の文脈での支援の在り方について、大きな気づきがあったという。場は違っても、今後も合同研修や情報交換をしながらともに活動したいという。

また日本語指導教室「はまっこ」は、学校の時間割や子どもの実態を考慮して、指導時間や内容について柔軟な対応をしていくことになった。「算数支援」は、名称を「まなびっこ」と変え、算数学習で子どもたちに自信をつけさせたいと張り切っている。

新たに放課後支援として、浜松国際交流協会から「子どもサポーターズクラブ」のメンバーも本校の支援に加わるようになった。初期指導から放課後支援まで一連の流れができることになる。

担当教員は、在籍学級との連携をさらに進め、教科指向型の指導の充実を目指す。担当教員の名称も「外国人児童支援」から「外国人児童教育」に変わり、教育課程のねらいにも「外国につながる子どもと在籍学級の子どもの学び合いを促し、互いの力を高める。」が加わった。外国人の子どもだけでなく、在籍学級の子どもの成長にもプラスになることも積み重ねていきたいと願っている。



## 支援者の活動



### 外国人児童支援担当教員

取り出し指導では、JSL 教科志向型の指導を進めている。体験や具体物を活用しながら、ショートステップで学ぶことができるようにする。また、外国につながる子どもが主体的に取り組むことができるような魅力的な学習活動の創出も重視している。



### 外国人就学支援員

少人数指導 T T の他、教育相談、学校行事の事前説明、母語による国語教材の読み聞かせ等、多彩な活動で活躍している。

\*以前は保護者としての立場から本校の PTA 活動に貢献した。地域のボランティア活動にも励んでいる。

### 外国人算数支援

教員免許をもつ指導員が、算数の取り出し指導を実施。在籍学級の学習も考慮しながら丁寧に教える。

\*平成 21 年度は「まなびっこ」に名称を変更する。





### ボランティア団体「そらの会」

週6時間取り出し指導のTTを行う。会員個人の善意で、昼休みに音楽の練習も一緒にしている。

\*平成21年度は隣接校で日本語支援を行う。

### 日本語教室「はまっこ」

浜松市外国人子ども教育支援協会より指導員を派遣。週4時間、希望者に日本語を指導している。

\*平成21年度は時間割や実態に応じて指導時間や内容を変更する。

